

〔翻 訳〕

## ジョリー・グラハム詩集全訳 (1)

〔訳〕古 口 博 之

1. *Hybrids of Plants and of Ghosts* (1980)  
part I, II …… (以上本号)  
part III, IV …… (以下次号)
2. *Erosion* (1983)
3. *The End of Beauty* (1987)
4. *Region of Unlikeness* (1991)
5. *Materialism* (1993)
6. *The Errancy* (1997)
7. *Swarm* (2000)
8. *Never* (2002)
9. *Overload* (2005)
10. *Sea Change* (2008)

### 1. 『植物と靈魂の混合』 (*Hybrids of Plants and of Ghosts*)

(Jorie Graham, *Hybrids of Plants and of Ghosts*. New Jersey: Princeton UP, 1980)

「あなた方のなかで最も賢い彼こそがまた植物と靈魂の不調和であり混合なのです」

ニーチェ『ツァラトウストラはかく語りき』

(But he who is wisest among you, he also is only a discord and hybrid of plant and ghost.

—Nietzche, *Thus Spoke Zarathustra*.)

わたしの母と父に捧ぐ  
(For my mother and father)

#### 目 次

#### I

物が動く方法は  
わたしは三つ教わった  
淫婦の風呂

竜涎香  
六月のテネシー  
植物と靈魂の混合  
セザンヌのための天使  
十字縫い  
見知らぬ物  
野生の花を描くこと

#### II

母の裁縫箱  
わたしの叔父を探す父に  
ウンヴリアではチコリーは八月遅く咲く  
統語法  
樹木医  
網  
ジャックポット  
ベルグソンのための収穫  
洪 水  
手の中のもの  
モンテスキューのためのアーティチョーク  
書 法  
ポール・エリュアールに

#### III

粹組み  
マーク・ロスコに  
雁  
新しい木  
わたしが貴方を裏切る理由  
鏡  
模 倣  
自画像  
ピアノを弾く少女  
鏡のわたしの顔が繊細な野望を語る  
静かな生活

#### IV

いかに朝顔が薄闇に咲くか

満潮のなかで  
連続の針編み  
緩やかな測深と究極の再出現  
証拠の性質  
こころ  
今や疾風は  
ルルド：友のためのシラブル  
死後の世界  
真珠  
ヴォルテールのための羽根

ついには  
何かが掴むことなのだ。

〔訳注〕

- 1) 翻訳するにあたり使用したプリンストン大学出版局版の *Hybrids of Plants and of Ghosts* においては、この箇所の語は *pully* と記されているが、訳者は *pulley* の誤植であると考えている。訳においても後者を選択した。

## わたしは三つ教わった

### I

#### 物が動く方法は

認めることによって  
すなわち開放することによる。  
これは一番簡単な  
流れの形：青の  
なかを動く青；  
紫をとおり 動く青；  
欲望の物体は  
わたし達がいなくとも  
自らを開く；  
信念の物体。  
物が動く方法は  
究極的に  
それらがそこに普通にあり  
それらが自らを明示できると信じること。  
車輪、運動の流れ、  
盛り上がり そして 落ちる水、  
鑄塊、てこ、鍵、  
わたしはあなたを信じる、  
シリンダー錠、滑車〔訳1〕、  
吊り上げる道具と  
クレーンはあなたの小さい頭を持ち上げる——  
わたしはあなたを信じる——  
あなたの頭はわたしの手には  
地平線だ。わたしは永遠に  
鉤を信じる。  
物が動く方法は

わたしの窓に面した木の名前を。  
ほとんど手に届くところにあり、しなやかに

リスたちに携<sup>たわ</sup>められ、記憶の貯蔵庫と家になって  
いるもの。

*Castagno*〔訳1〕は心に深く刻まれ、その莢<sup>きや</sup>は

海栗<sup>う</sup>のように落ちたところにしがみ付き  
縁のところに

影を作った。*Chassagne* は、風がより強い日に、  
琥珀織のガウンを着てそわそわと、

育ちは良いが、無秩序になりそうに、  
囁いていた。

そして それから *chestnut* は、同じような作用の  
ため呼ばれ  
全ての内部の貯蔵所により

青白く清く鞭打たれていた。  
それは何もしないで得られる木のたぐいではな  
かったのだ——

想像してごらん——  
残された一枚の葉が

忠実だったことはないのだ。いや、これは  
すべてまず人であったのだ、そしてわたしは

幹であり、わたし自身のなかに  
同時に与えられ 受け取ったところの

全部で三つの花束があるのだ：一番ちいさな  
偶然の道路地図。開花を支配する

観念は何だろう？ 数々の名詞におおわれた  
人のような木、まさに窓の外

それはあらんかぎりはっきりと  
言っているのだ

それがついにはわたしの窓枠にたどり着き、  
葉は抑圧された欲望のように静かとなり、わたし  
は

その中のひとつの名前となることを。

〔訳注〕

- 1) イタリア語で榿の木のこと。以下の *Chassagne*  
はフランス語と思われるが不明。榿の木はフラン  
ス語では *chêne*。 *chestnut* は英語。

### 淫婦の風呂

しかし、水はわたしを裸にしない、そして体の上  
にその硬貨がたまるところ

太陽は教会を築き、石鹸は温室を作る。  
それらは空っぽのままでもいいのだ。

ああ いつ全ては永久の蜃気楼となるのか  
跪き、わたしは  
自分の顔の中に浸ることができる、——現実とそ  
の証明——の両方を  
消失させながら。なんという織物！

しかし、それは何を形作れるのか、解放された精  
神は  
漆黒のうに海栗がそのとげ棘の愛に自らを失う様を見せ  
る。  
桶を持ち上げて、白く泡立った水はうなじにかか  
り

〔翻訳〕 ジョリー・グラハム詩集全訳 (1) (古口)

腰の周りに消えてゆく

一つ一つの肌の衣の  
罪を赦すのだ  
まるで頂の単一の観念より大陸が水に無謀にも  
降りてゆくように。清潔は

そのような不変の衣服、そのような完成された論  
証。

どこでそれはほどけるのか  
わたしが再度立つとき わたしは地表に感嘆符を  
投げかけるのだ、  
それはとても堅固で

もろい。とても信じることのできるものなのだ。  
いま わたしの体に流れ落ちるものは今よりも他  
の季節に流れ込む

しかし、水は  
一つの潜在する影、一人の求婚者のように冒険を  
する。だが、わたしには

いまその表面を通しては何も見えず、髪の毛はよ  
じれ、調和は  
崩れている。風がたつところでは、  
コオロギが指先の  
輪のように…。最後に

わたしが望むものは  
他の人の瞬間とは違う瞬間への郷愁なのだ、全裸  
となり、清潔であり、  
分け与えることのできないものだ。

### 竜涎香

わたし達の肌は全景、海なので、  
わたし達は記憶されるか そうでないかだ。

生きたままでは見られないイカは浮き上がり  
水の上の月光を追う——どんなものでも

いつも逃げるものは望まれるものなのだ。

そうすることでイカは座礁し、あるいは

敵の鯨に捕まる。ときどき漁師たちは  
小船の舳に提灯をさげ

陸に向かって漕ぎ戻る。証拠を  
信じるには

長い時間がかかる。  
波の上の壊れた月を考えてごらん、

塩水の上の  
月光の失われた匂い —— ついには

ある型が出現する。ダイオウイカは  
めったに生きては見られないが、しばしば捕鯨船  
員は

鯨のなかで死んでいるのを見つける。そこでは  
それは強力な芳香を放ち、

その精神—— 歓喜、夜間飛行、緑の  
楽園—— は常に

完成したものになろうと蠢く<sup>うごめ</sup>のだ。竜涎香、彼女  
の名前は  
なんだった？ それはわたしの前ではほとんど手に  
届くくらいのところを動く——

ジャスミン、ラヴェンダー、ベルガモット、バ  
ラ...

## テネシーの六月

これは万物にきずを見つけ  
きずを愛する熱だ。  
何物もその精神より重いものなどない、  
何物もその中の肉体ほど閉じ込められたものはな  
い。  
キスゲは夜のうちに育ち、わたし達の芝生は  
顕わとなり、それから嘘のように明るく、そして

また顕わになる。

あなたの心が論理なしに彷徨い、  
あなたの体はへこんだ川床の両側だと想像してご  
らん...

そのなかでは、どんな世界も  
隣りあうものを越えれば生きられなくなり；  
常により少ないものになろうとする圧力が  
そこでは永遠に  
必要な圧力となるのだ。ああ

それをあなたに触れさせよ...。  
ポーチには鋭い光が差し——それは肉体の小さな  
箱——

そしてハンモックは簡単にその縁を越え揺れてい  
る。

向こうでは、暑くなったシダの群れがあり、螢は  
太ぶととしたタバコの繁葉にガーゼをかけるよう  
に光り、

コオロギは暑さをうがちそして埋めている。  
あの暗闇に踊り出せ そして  
盲目の蛾たちがぐるぐると、  
骨のように白い家から伸びつつある蔓へ行ったり  
来たり、

回っているところにもどってこい。  
何物もあなたを捕まへはしない。  
何物もあなたを離しはしない。  
わたし達はそれを開花と呼ぼう——  
精神があなたから破れ出ても あなたはいるのだ。

## 植物と靈魂の混合

それは移植、  
普通の華の、この失われた数々の意志の合体なの  
だ。

完全性のみが守られて、  
完全な個々の事象は消える。キンギョー

ソウよ わたしは何をあなたに期待できるのか、  
余所行きの服か。

変装をするように、  
みごとな骨はわたしを見えなくする。

それは無益なことだ。いきあたりばつたりの  
わたしの心の失われたハンカチは、

わたしが落としてしまったものであり探さなくて  
はいけないものだ。

本当に、鍵なのだ、

なんとわたしは血の色あいを、  
房を好むのか。アーモンド、

石果、  
あなたは桃に、杏にもなれる——

でも分かってください あなたがすでにそこにい  
なくとも  
いかにあなたが近くにいるかを、

夕暮れがあなたの腰のところに暈まれ、あなたの  
足に滑り落ち、  
足がしっかり立つ時、

暖かい夕暮れは歩けと言ひ、あなたの行くところ  
はどこでも  
あなたのものとなり、甘美な匂いが早や出てき  
て、花開くことは

まさに奪われることとなるのです——。  
皺など無く、気高き白い花卉よ、

わたしはあなたの均一の編物を壊し、あなたの結  
び目を解いてもいいですか、

そして、もしわたしがあなたを壊したら、あなた  
はわたしのものになりますか。

### セザンヌのための天使

ほとんど目に見えない

黄昏の羽根のシャトルは  
美しいネットの上を漂い、  
空虚なクチナシの林に  
花を咲かせにやってくる。

幸せが存在する  
からではなく、  
これらの——イチイの木や、  
暗い夜を押しとどめる  
暗い窓や、  
白い花などの  
連続性から  
推論できるからなのだ。ここの  
信念という縁で、  
凧が横断したところの  
境界は  
わたし達に属するものであり  
かなり長い間  
保たれているものなのだ。木々の  
間隙は  
より速く動く。  
手を離れる瞬間に  
凧のきびきびした  
欲望のなかに  
それらが感じられるのだ。頭上では、  
雲の庭園のなか、  
家から遠い家のところ、  
あまたの尾が纏められ  
手繰った模様の、  
優しい凧は  
突然自らを  
支えてくれないものを発見する——円錐形、  
円柱、球体、そして  
わたし達のあいだにある  
ガラス板を削る  
息のような署名など。

### 十字縫い

わたしには見つけられないコオロギがいる、この  
家に幽閉され、大声で鳴くが目には見えない  
だがまったく家になじんでいるのだ。彼は

わたしがライトをつけると歌う。  
彼がどうやって

ここに来たのか  
その永遠の忘却ほど大きな声はない。わたし達の  
人生には  
もう一つの人生があり、それをわたし達が忘れて  
しまう  
同じ出来事の第二の記憶なのだ。外側では、

わたし達は他人の話しを聞き、  
他の主人公を信じることはできるが、内側では、  
彼の存在はわたし達を殺してしまうだろう。  
わたし達の最良の世界では、完熟した

西洋梨の全き芳香は、日光の一部となり、  
わたし達のなかへ入り込もうとし、  
路に迷ってたどり着く：それらのものは  
もう一つの目的地であり、

わたし達のなかへ、はっきり形をとりながら  
花開く一つの誇りの形なのだ。失われた方向の  
あの世界では  
キササゲの木が わたし達の関心を引くであろう  
唯一の時のため  
その周囲をここぞと着飾っている、  
そして 柳は地面よりさらに手を伸ばし  
草を指で捕まえようとしている。しかし、  
それらの緑の回路が完璧に出現する その外では

あらゆるものがその消滅を  
わたし達のなかに移し変えるのだ。このコオロギ  
は、たとえば、  
そこからここへの路を見つけ、  
そして その路を見つけてはそれを失うのだ。

### 見知らぬ物

本当にチューリップは  
あまりにも早く  
時制を変える。

それらは開き 飛びさってゆく。  
そして、絶対的なものを  
追い詰め逃がさず、蕾は

果樹から破れ出て、  
空の尖塔となる。  
信念とはわたし達が  
満たされず、  
期待もされない所にある――

しかし、急いだほうがよいのだ。  
ムクドリ達は  
尖塔の目に  
糸を通そうとしているのだ。  
それは難しい、  
超えることはできないのだ。梨の木の

肌は梨の実のように  
滑らかだ、そして 団栗<sup>どんぐり</sup>は  
ついには  
榎の中で  
選ばれることのなかった道のことを知る。  
物のない世界に

わたし達の心はないのだ。  
わたし達の生の活力は  
分離にあり、  
多数のなかで  
自らを不思議に思う  
無限性にあるのだ。黄昏に、  
物が消えようとする時、あなたは  
小さな赤いボールを  
わたしに投げ  
わたしはそれを返す。  
奇跡とはこれなのだ：  
暗くなり

見えなくなるまで  
何度も何度も  
わたし達が作る  
完璧な赤い弧が、  
わたし達を越え

それ自身を  
完成させるのだ。

### 野生の花を描くこと

わたしはどんな色も使わない、ただ3という数字  
だけ、  
濃淡を付け忘れることはあるけれど、このやり方  
で  
変化は背負うべき圧力となる、そして それか  
ら——  
あたかも真実のようなものがより真実となる——  
  
次々と紙の上に刻まれる蜘蛛の巣、花がほとんど  
消失するに伴い  
生じる花。  
一つを選んで  
わたしはどこからでも始められる、そして それ  
が弱くなり、しおれる時  
  
それを無視する。  
わたしはその瞬間の明暗を描ける——誘惑的なも  
の——だが、明暗は  
とても早く姿を変える。  
しかし、それを描くとき、わたしは花を、悲劇的  
で獣的な、ある種の

過程の心として描き、それがいかにも信じられな  
いものように描くのだ。  
わたしはそれにわたしの疲労を運ばせることがで  
きる、  
また それを消えるようにもできる、その時素描  
は  
空気の素描となり 午後は花のような襲でもって  
注意深く疵<sup>きず</sup>をつけながら描かれる。  
屋内に移され そして 花瓶と揺れの無い光に留  
まる時、わたしはくつろげる、  
しかし、その時の移動は孤独で、何か高く、乾  
き、そして  
慣れ親しんだもので、

何か高貴なものとなっているのだ。  
花束は別なものだ——紫ルピナス、紅カステラン  
ウ、桃色の忘れな草はぶつかりあう。  
人は真似をすることで、  
自ずと現れる——ものの

暗示された現実を作ることができるのだ。  
しかし、同じものではなく、不十分さがあるという違いがある。  
水彩画はその外観を描くことができるだろう、二  
つの地図上の  
敵対する土地が  
互いの境界に忍従しているようなもの——だが、  
それは抽象的な  
平和であり、赤紫色が深紅に出会うようなもの  
だ；深紅は、緋色に。  
しかし、わたし達の原野にあるこれらの、現実、  
紙、花束は、  
交渉はしない、そして わたしは  
黒と白とそれらが作る灰色の戦いをなんと愛して  
いることか。

## II

### 母の裁縫箱

古いクッキーのブリキ缶に入っていた、というの  
も  
物は暗闇で  
長くもつからだ。  
彼女は一人にされる必要がある。  
ここには  
取っておくには短すぎる  
糸くずや、針の  
針孔などがとつてある。  
糸には  
結び目があり、座ったまま  
飛びたつぬ鳥となっている。ボタンは  
車輪。これらの

不揃いな器具を集めると、  
それらはこう言うのだ、  
どれだけの努力をすればいい、いや、待て、  
わたしは気が変わった、  
一緒にいきたいと。  
背くことは  
隠れること もしくは  
矯正されないままにいること。おそらく お前は  
それを見つけるだろう、  
と彼女はわたしが  
彼女の持ち物を持ってないし、取りもしなかった、  
と言った後でも言うのだ。  
糸巻きが  
列をなしている。ムクドリ  
群れはわたし達はピンだ、  
ピンだと叫ぶ。わたし達はとても速く進んでい  
る。  
おそらく お前は  
見つけるだろう、たぶん  
お前は見つけるだろうよ、回転盆には  
黒い目がある。針は、  
その軌跡を覆い、  
縫い目で  
模様を作っている、針山は  
あばたの体で  
折れた羽根のよう……  
そして もし彼女が去っていなければ  
彼女はまだそこに生きているのだ。

### わたしの叔父を探す父に

手掛かりはどこにでもある。  
木々のあいだ、森をよく見えるようにする僅かな  
隙間風。  
死滅したものが優しいと信じられるには永遠の時  
がかかる。  
わたし達は松の木にそれらの消極性を感じる  
少し非難をして葉の針をうごかしているのだ。  
西バージニアではそれらは芝生の上の花束で目印  
をつけられる；

それぞれの花束の端には、放そうとしない手があ  
り、  
彼の引き出しには隠されも見つかりもするものが  
ある。

わたしの父は彼の兄弟の灰を壺に入れここに埋め  
たのだ  
ライ麦のウイスキーの瓶と一緒に。  
後で、父は彼を一人で飲ませたくはなかったの  
だ。  
おまえはどこに行ってしまったんだ。秋に、

木々はよそへ行き、  
後には、旅には合わない、より重い羽根を残す。  
黄葉のカーペットの下を、それとも  
まだ煙草の味のする壊れたティーカップの破片を  
見てごらん。

クリスマスに、わたし達は一日に一枚、  
カレンダーの窓を開け、ついには飽きることの無  
い自由な別の部屋が、  
小さな共同体が、シャッター付きの夢のようなも  
のがあるということを感じたのだ。

### ウンブリアでは チコリーは八月遅く咲く

秋、小鳥には  
獵期がある。  
丸ごと食べるのだ。  
八月遅く  
鳥たちは一晩中鳴き  
まるで自分たちの体を  
小さな音符にするかのように  
電線の上に整列する；  
彼らの歌はとても簡単なものだ、  
家に帰る男たちのように  
ほとんどまっすぐの列となり、  
そして背中に  
革紐をつけた、  
忠実ではないが



喜んで服従している犬のようだ  
(それともそれはだからなのか)。  
あなたは入ることはできない  
と鳥の鳴き声がする；  
あなたは入ることはできないと  
十三世紀は言う；  
あなたはできない、と空は言い  
あなたを落とし他所を  
見せる。チコリーは  
八月遅く咲き出し、  
紫の頭が  
まるで草のスカートのように  
わたしが昔  
裸だと思っていた  
ものを覆う。  
それらは野生だから  
役に立つのだ。  
昔々、  
よく言われるように、  
彼女は結局彼をものにしたのだ。

### 統 語 法

毎日朝夕 黒い葉のように  
ムクドリ達は横切る、  
翼の規則的な統語法となって。  
墓石はおのおの、  
隣のものより少し傾き、  
まるで全景を  
見ようとしているかのよう——  
人混みのなかでするように、  
  
わたし達は他人を排除しようと動く、  
卑しめることなく  
また、なんと会話では、わたし達は  
後ろにさがることなく横へどくことを願うのか；  
もしくは欲望においても。  
目は閉じられるとき  
最もわたし達のものになると言う、  
物はわたし達に見られている

という証拠は何も見せない。  
たぶん わたし達はそのとき動き  
木が静止しているのを見るが  
わたし達から反対の方向へ動き、  
距離というよりむしろその損失を感じるのだ。  
池が凍ったとき  
その繊細な表面にわたし達は自分の名前を彫った  
文字から文字に跳ねて  
  
自分の足跡を消した。  
わたしは興奮して自分の名前の綴りを間違えてし  
まい、  
とても大きい名前だったので  
最初の雪解けが  
針のように  
水を縫うまで ずっと残るのだらうと思った。  
春にわたし達はウシガエルを獲った。  
鳴き声を上げたものを捕まえたのだ。

### 樹 木 医

昨夜の夢のなかの触角のように、スクリーンの外  
に  
彼らはほぼ輪になって わたしの隣人の榎の木の  
周りを動く。  
楽しいな役者のように、  
ここは自分たちにふさわしいと感じ、  
  
彼らは細心の注意を払って枝を  
歯の付いた帯の大きな弓鋸で引く。  
なんと曲がった道具なのか！ それでも  
対称性は守られ、  
  
二つの巣と、二匹のリスを残した榎で、  
妥協の上の痩せた榎なのだ。  
なんと同じように伐られたのか、微妙な陰翳もな  
い木、なんの好みもなく、  
日のあたる半分は  
  
赤色を加えるカージナル鳥もいない。わたしの隣  
人は玄関を掃く。

思ったより時間がかかっているのだ。  
一時的にというものは無いのだと彼女は思う。  
彼女は密かに塵に感心しているのだとわたしは思  
う、なんと平らに一つ一つの粒は

あるべき所に落ちるのか、  
まるで寛容さよりも  
物自体の意味——小机や飾りだんす——から育つ  
たかのように  
ただ夢を見ていたのだと書いてあるきれいな石板  
よりもずっとましなのだ。

木はほとんど仕上がった。  
新芽から根幹へ、いまや全ては始まったところに  
戻ったのだ。  
わたしの窓は二つに分かれていて——  
彼女の楡と、それから わたしの楡があり、毛む  
くじやらで、

別な方向を向いた。  
立ち去るもの、そして 留まるもののように、そ  
れらは  
いつも互いの不機嫌な犠牲者となる、  
けれども 互いには

安全なのだ。  
まだ暗闇ではないが 昼の光は消えてしまった。  
わたしは窓辺に立つ。光が入る。  
どうしてか分からないが、お互いからあまりにも  
安全なのだ。

## 網

火事が起こったら、父はわたし達を救っただろ  
う。  
日曜日ごとに、おのおのの場所につき、  
わたし達は練習をした——  
みごとな蜘蛛の巣のように織り込まれた

りっぱな管の網。水はたくさんあり、  
わたし達一人一人は節のところに 配置につき

とても安全に感じた。  
わたしには本当に基盤のことは何も分からなかつ  
た、  
驚くべき滑らかな芝生の下の方——

個人的愛国心。  
また何物もこれほど危険で、傷つきやすいものは  
なかった。わたしは自分が思うほど  
父を知っているわけではない、が結局  
誰かを知ることができるといっても

わたし達がその人に約束をしたことだけだ。だから、  
わたしには分かる、  
まるで風邪のように、知らず知らずに、火がつい  
てしまうことを、  
そして 余った根っこのようにわたし達の土地の  
周りを回っている  
これらの小さな道は、

実際 わたし達自身なのだ——影の地図、当然の  
義務により  
生かされている未来なのだ。  
それらの接合点で、世界は世間と同じくらい私的  
なものとなり、  
すべての人に

管理される秘密となる。ちょうど、穴深く、  
侵入し続ける外界のさまざまな形の命のおかげで  
生命が生存できるように。だから……  
わたし達を救うために水があり、そして

深遠な好奇心がある——噂のように、網をうち引  
き網でたぐり そして  
わたし達を真に捉まえることができるような  
表面をこしらえている、また  
ライラックの匂いがあり、ふと耳にした歌がある：  
じきに皆はそれを捉まえたのだ。

## ジャックポット

イリノイ州を半ば過ぎたとき ラジオでは

ジャックポットを流していた。  
勝った人達の金切り声が聞こえる。  
この景色には運はさっぱりなく  
まるで地面に入って それにくっ付いているかの  
ようだ。  
その跡は見る事ができるのだ、フェンスにか  
かったトウワタや、  
太陽の光か白いペンキのような  
新しい草の上の光沢に。  
しかし、ブラシの跡は目に見える。  
それなしでは見るものは何も信じられないだろ  
う――

茶色のもの、緑色のもの、長方形のもの、高架道。  
悲しみは  
自然とその中に入ってしまったわたし達の存在だ  
と今は思う。  
少したてば暗闇が来ることを願うが、  
家やこれらの木々は半ば自らを埋めようとしてい  
る。  
今日はあなたの幸運な日になるのだ、  
家の上に屋根が載った日だし  
柳はふたたび木々に似て  
橋は落ち、川はもう一度とても渡れないように  
なっている。

### ベルグソンのための収穫

昨夜 わたしは収穫月が上がるのを見た。わたし  
のなかには  
蛾が囚われていたのだ。それらがまるで指先のよ  
うに  
壁と窓ガラスを打つのを聞いてごらん。 という  
のも、月光は  
事実をばかすからで、

それからできる影は日光の影のように厳しく合  
理的でなく、  
物の本質をとらえようとはしない；  
それは、むしろ、それを開放しようとし、  
それでないものを見せようとするのだ…。

なぜなら それはわたし達のなかの獣的でないも  
のであり、  
わたし達がなお知覚する瞬間に持っている  
すべてを見ようとする最良の意志なのだ。  
その時 わたし達は興奮し、悲劇的になり  
知性に刺激され、

分離していくのだ。わたし達が住んでいる世界は  
変わろうとし、消滅し尽すのだ。  
これは常に視覚のように感じるかもしれないが  
だんだん目を見えなくさせる光なのだ。これは側  
面から

見た世界で、中世的であり、  
表面にまとまって現れた景色であり、前景なの  
だ；  
そして もし前景が揺れれば  
それはわたし達を、これほどないほどやさしく、  
揺り起こすものではない；  
いや、それはわたし達に眠るよう促すものだ、

戦争が差し迫ったとき 城壁のなかに農民たちが  
集まるように  
視界はものをたぐり寄せる。遠景や、野原は、  
バロック的になり、それから 荒々しく

そして 乾いたものになる。そして 目を細め  
て、  
今夜の月に照らされた塀ごしに眺める人達は、  
自分たちのものである空虚な野原をあまり理解で  
きないのだ；  
それは彼らの心を滑り落ちる…。 これは持続  
性ではなく  
時間のなかで死ぬものだ。

### 洪水

何日もただ雨が降り 至るところそれは入り込  
む、  
まるであまりにもはつきりしすぎた

役に立たない欲望のように、水は  
世界が持ち上げようとするスカートのように  
債務の限界のように

上がっている。  
どこへ行こうとも あなたは湖の間の土地であ  
り、  
思わぬ運で世界を持ち  
それを二つの  
翼に分けるのだ。  
わたし達の池は

ほとんど繋がった。望んだことより わたし達  
はどれほど多くを手に入れなければならない  
のか。多くのものよりどれほど多くを。良き  
物が  
あまりに  
多くあって、  
頭は  
王冠となる…。

このシンデレラの土地がなんと着飾っていること  
か、風船のように膨らみ、  
すべての支脈に乗り上げ、彼女のガウンは  
上がり 沼沢から池へ  
そして 芝生の窪みまで

上がっている。  
ああ 足長の客よ！  
どこから彼女が来るのか  
わたしは知らない、だが 新しい欲望の頂上から  
わたし達の居間へ  
やって来るのだと思う  
そこでは 愛は  
他と同じように明かりを消し、消灯の鐘を  
船の合図だと  
考えるのだ。消える  
前に  
戻されるべき

ものは何なのか。  
湖の間の土地は

狭くなってきている。  
光を消せ、でなければ 水がそうするだろう。

## 手の中のもの

藪のなかに また入ろうとしている鳥は、  
まるで意思を  
取り戻そうとする 概念のようで、  
再び飛ぶ前に  
見失った発見物を  
探そうする。

その小さな黒い精神は  
その翼にしまわれ、  
最も柔らかいアコーディオンの  
その音楽は  
レンギョウの  
危うい  
冬越えの群れへ  
うまく着き、  
その中へ消えてゆくのだ。ちょうど  
時折 わたし達が  
より良い欲望を求め  
言語すべてを  
再度捉まえようと  
するように。  
ただ わたし達が  
より良い光の弧を  
想像できさえしたらいいのだ；欲しい物は  
まさに手に入るのだ。  
そして アルファベットが  
偶然のため  
いかに美しくなるのかを見たまえ、  
まるで失望の後の  
疲れた母親のように、  
わたし達には何も知らせないで——それで わた  
し達は  
出て行った男を  
思い起こしてみたくなり  
あらゆる説明を加えたくなるのだ。  
手のなかのもの、  
心のなかのもの、

あなたは自分が何を持っているか  
とてもはっきり分かるのだ、  
彼が何がしくて、させれば何をするのか  
とてもはっきり分かるのだ。

わたし達が持っているものの核心へと繋がれる。

〔訳注〕

1) 植物の名で頭花が食用。チョウセンアザミとも言う。

モンテスキューのための  
アーティチョーク<sup>〔訳1〕</sup>

書 法

その花びらは自らは開かない。  
それぞれは野原を支配しようとするけれど、  
囁きが願い事に差し出す  
手のように、  
それはわたし達の役割なのだ。残るものは  
心臓で、その頭花は  
匂いばかり 求めすぎないようにするための  
小さな注意。つぎの質問は  
花びらが答えるのに部分的に関わる：どこに  
神はいるのか。宇宙はどのくらい深いのか。誰か  
住んでいるのか。アーティチョークは  
ここにあり わたし達は  
それを創るのにどんな宇宙が必要だったかを想像  
する、  
透視できる宝石；  
なんという数学。  
それから、いまや、

地球はもう世界ではなく、それは  
小さな信じられる宇宙論なのだ：  
おのおののちっぽけな葉は一つのオールであり  
戦いにおいては一人一人が自分のものを引いたの  
だ；そして 全体は  
王自身であり、王冠か または  
笑っている大衆のように段々となっている。  
心は心臓に  
このような土地で出会い、お互いは  
他方に屈し  
それを勝利と呼び、  
敗北と呼ぶ——  
無人地帯であり そこで わたし達一人一人は  
開き、開かされ、そしてそこで  
わたし達にできたであろうことは

心の中で、限界を超え、勝者はうまくやってゆ  
く、  
一方 ここでは大きかったり小さかったりする目  
を持つ、  
lの字が一行となり進む。  
どんな天国が真実なのか  
その許しが  
かなり違うのに。ページは  
めくられている。もう一度試してごらん。どの  
ページも新しい装飾で、ここでは  
人のいない海岸にfのたくさんの閉じられた傘が  
あって、sの作る波は繋がりあうことができず、  
岸につき、そして これは  
一つの温室なのだが、漕いで漕いで わたしには  
欲しいものさえ  
選べない、

そして これは わたし達が取り戻そうとする砂  
漠なのだ、

そして これらの 洪水にあった低地、表土は下  
流に流れ、海洋は  
緑の服を照らつかせ、たくさんの茎とたくさんの  
頭をなし、

そして この流れを泳いでくるわたし達の冷淡な  
一群の二十六は、  
泳いでゆき、何度も何度も  
試されるのだ、

そして ああ、一つずつ、それらは正常性と婚姻  
をもとめ、

これらの唇音と咽頭音は狙いをしぼり、  
肉体を削ぎ  
純粹な概念で、本当とは思われないほど本當な思  
考の、  
その願いを求めるのだ。スイ

レン、水-  
澄まし…。

### ポール・エリュアールに

ミンクの毛皮のコートを着て  
オペラ座の前に立っている芋虫たちにさようなら。  
彼らは待っているのか、これが忍耐なのか 誰も  
知らない。

結婚の指輪をまさぐっている時計どもに、  
咬いている月に さようなら、  
さようなら

民衆の欲求に。  
七つの美の長い頭は切り落とされている；  
わたし達はそれらを戻しているところだ。最後に  
は

世界はいままでになく人のようになり  
わたし達は塵で  
わたし達から離れてゆくものだけに譬えられる。

倫理学の教授たちは野原に集まり、  
穴のあいた網を持っている。  
蝶たちは意味が消え去ることを教えてくれるの  
だ。

一つとて逃げ去らない。